

『英文学評論』総目次 第一集～第四十九集（昭和二十九年三月～五十八年十二月）

第一集（昭和二十九年三月）

- ミルトンの芸術性について  
 バトラーとドライデン  
 シヤフツベリの思想の二重性について  
 十八世紀の詩論  
 ヘンリ・フィールディングの小説について  
 エマソンの文体  
 イマジズム  
 『楡の樹蔭の欲情』断想  
 クリストファ・フライの詩劇  
 視覚的表現と分析的表現  
 Perfect の主流  
 On the Pronunciation of "Annusee"  
 and Secondary Stress in General  
 書評を兼ねて  
 新刊紹介  
 第二集（昭和三十年三月）  
 ウィリアムズと『失楽園』の構成  
 フィールディングとホガース

宮西光雄  
 山村武雄  
 川田周雄  
 村上至孝  
 飯沼馨  
 中野正順  
 大浦幸男  
 山内邦臣  
 高谷毅  
 池田義一郎  
 松木泉  
 小林象三  
 深瀬基寛  
 宮西光雄  
 飯沼馨

十八世紀の詩論  
ドラマチック・ソング  
 劇的独白

- ホプキンズとブリッヂェズ  
 人としてのT・S・エリオット  
 ノーマン・メーラーの『裸者と死者』  
 象徴の後退——言語と実在  
 アイルランドの英語について  
 Prose and Verse  
 或る書友への手紙  
 新刊紹介

村上至孝  
 中野正順  
 山村武雄  
 角倉康夫  
 山内邦臣  
 池田義一郎  
 松木泉  
 小林象三  
 深瀬基寛

第三集（昭和三十一年三月）

- アイルランド演劇の創始者たち  
 ポープと剽窃  
 ドルベンの詩をめぐる考察  
 イェイツの『最終詩集』について  
 ロバート・フロストの対話詩  
 天才と女神  
 Sentence Stress and Prose Rhythm

山本修二  
 川田周雄  
 山村武雄  
 大浦幸男  
 村上至孝  
 中野正順  
 小林象三

第四集 (昭和三十三年三月)

三つの演劇用語について  
現代におけるミルトン再評価  
シェリ——『世俗の凱旋』——  
理想の批評家——アーヴィング・パビットの場合

山本修二  
宮西光雄  
森清

E・M・フォースターにおける野性的人物  
島文次郎先生の思い出

角倉康夫  
村上至孝  
深瀬基寛

第五集 (昭和三十三年三月)

故郷の喪失  
「他者」の思想  
アーヴィング・パビットと大学教育  
イエイツと老齡の問題

深瀬基寛  
中野正順  
角倉康夫  
大浦幸男

『偉大なる神ブラウン』とオニールのなるもの

山内邦臣

『ドイッチュラント号の難破』を通して見たホプキンスの

山村武雄

第六集 (昭和三十四年三月)

悦しき知識  
ヤングの『夜の随想』  
ブラウニングの詩心  
孤塔の詩人イエイツ

深瀬基寛  
村上至孝  
中野正順  
大浦幸男

ユージン・オニールの『夜への長い旅路』  
古典と教育

アーノルドとアメリカ  
山内邦臣  
角倉康夫

第七集 (昭和三十五年三月)

ドライデンの詩的展開  
ハーディの短詩をめぐって

山村武雄  
増山学

孤塔の詩人イエイツ(その二)  
D・H・ローレンス——問題と応答

大浦幸男  
寺田建比古

Literature and Democracy  
Roger G. Matthews

第八集 (昭和三十六年二月)

『マルタ島のユダヤ人』試論  
——主人公バラバスの変貌——

岡田洋一  
山村武雄

ドライデンの詩的展開  
ウィリアム・ブレイク——『虎』——

竹森修

孤塔の詩人イエイツ(その三)

大浦幸男

第九集 (昭和三十六年三月)

『ジョンサン・ワイルド』の周辺(I)  
孤塔の詩人イエイツ(その四)  
後期エリオットの根本問題(一)  
——『一族再会』・分析と解釈——  
ホプキンス巡礼

飯沼馨  
大浦幸男  
寺田建比古  
山村武雄

第十集 (昭和三十七年二月)

説得とドラマ——『ハムレット』第四幕第七場より——

ミルトンの失明をめぐる問題

『ジョナサン・ワイルド』の周辺(2)

アーノルドの古典主義(1)

オックスフォード拝見

鳴原真一

宮西光雄

飯沼馨

川田周雄

佐々部英男

第十一集 (昭和三十七年三月)

呪われた運命

——『ハムレット』におけるモラルとアクション——

尾崎寄春

「詩的想像力」における根本問題序説(1)

——ロマンチズムを中心として——

アーノルドの古典主義(2)

「猿と本質」に就いて

フランク・ノリスの文学的本質

竹森修

川田周雄

中野正順

安藤昭一

第十二集 (昭和三十七年九月)

ポウプと注釈

イエイツの劇

「怒れる若者たち」

「アナ・クリステイ」——その「舞台」と「背景」

について——

川田周雄

大浦幸男

竹森修

山内邦臣

第十三集 (昭和三十八年三月)

コリンズの『雑題頌詩集』——擬人法と想像の問題——

アーノルドの古典主義(2)(続)

『キャスターブリッジの町長』——性格の悲劇——

William Golding and Jehovah

酒井幸三

川田周雄

岡田洋一

Dennis Keene

第十四集 (昭和三十八年十一月)

「ハムレット」の悲劇性——その一面——岡田洋一  
十九世紀の俳優たち——ひとつのプロローグ——

高谷毅

人間把握の変貌

——シンクレア・ルイス『メイン・ストリート』

より——

遁走と追跡

——『喪服はエレクトラによく似合う』序論——

イエイツ・カントリ・巡礼記

第十五集 (昭和三十九年三月)

古代英詩における四季の概念

オースティンの『エマ』について

【遺稿】T・S・エリオットの方法

山内邦臣

大浦幸男

佐々部英男

宮西光雄

高谷毅

——シンボジアム——  
米英における英語教育

(司会) 中野正順

尾崎 寄春・安藤 正一・大浦 幸男

第十六集 (昭和三十九年十月)

『ジョンナサン・ワイルド』について(1)

『クラリッサ・ハローウ』の周辺

『ハイペリオン没落』序詩をめぐって

ポールの悲劇——『息子と恋人』

ヘンリー・ジェイムズの後期の文体

三つの女僕物語

飯沼 照雄 峯  
岡 下千吉  
松村 久透  
奥村 久義  
渡辺 久義  
鳴原 真一

第十七集 (昭和四十年三月)

マールロウとシェイクスピア

——『タンバレイン大帝』と『ヘンリー六世』

——『二部・三部』——

『ジョンナサン・ワイルド』について(2)

未知なる世界を求めて——『虹』

『波』覚え書

伝統とフィリップ・ラーキン

岡田 洋一  
飯沼 馨  
奥村 透  
増山 哲雄  
喜志 雄

第十八集 (昭和四十年十一月)

シェイクスピアの『ヴァイン』(1)

——その近代性について——

尾崎 寄春

スウィフトの『桶物語』——詭弁と否定のレトリック——

キーツとワーズワス

『闇の奥』(1)

イエイツの教智——イエイツ生誕百年を記念して——

I. A. Richards の価値論

On Putting Pen to Paper

James Crichton

第十九集 (昭和四十一年三月)

中世英詩における春の概念

ラムの『定年退職者』

『闇の奥』(2)

ウルフの最後の小説(1)

現代における創作の問題

——T. S. エリオットとジョイス——

『ジョヴァンニの部屋』について

——ジェイムズ・ボールドウインの実験——

MT というもの

英語科教科教育法の問題点とその解決案

酒井 健三  
松下 千吉  
竹森 修  
大浦 幸男  
角倉 康夫  
佐々部 英男  
山崎 正雄  
竹森 修  
増山 学  
渡辺 久義

第二十集 (昭和四十二年三月)

シェイクスピアの『ヴァイン』(2)

——その近代性について——

尾崎 寄春

ナッシュのソング「悪疫の時に」・私註 松下千吉  
ドライデンの英雄劇 再考 山村武雄

「ウォルデン」にみられる東洋思想について 尾形敏彦

故名誉教授深瀬基寛先生を悼む

第二十一集（昭和四十二年八月）

「簡素によせる頌」注解

——コリンズにおける自然観の背景——

酒井幸三  
長谷川年光

イエイツの劇的なる精神をめぐって

——「息子と恋人」から「恋する女たち」まで——

奥村透  
角倉康夫

第二十二集（昭和四十三年一月）

イルージョンとリアリティー——マードック私見

佐野哲郎  
尾形敏彦

エマソンのユニテリアニズム批判について

——その非宗教性について—— 三宅卓雄  
蜂谷昭雄

Alastor の意味

Insight as Answer  
——A Note on D. H. Lawrence P. C. M. Gardner

第二十三集（昭和四十三年十月）

古英語における愛の一表現

ジョージ・エサリッジの第二作 喜志哲雄

「闇の奥」(3)

第二十四集（昭和四十四年三月）

Oe Freund について

「闇の奥」(4) 佐々部英男  
竹森修

ソーロウのジョン・ブラウン弁護について 尾形敏彦

ドス・パンスと第一次大戦

——「三人の兵士」と「一九一九年」をめぐって——

田中礼

第二十五集（昭和四十五年三月）

「マクベス」——存在と時間——

岡田洋一

ドライデンの一つの見方——叙事詩と諷刺詩との関係—— 山村武雄

Glae・「歎び（の歌）」という言葉の復活について（その一）

——ブレイクの「無垢の歌」の場合——

松下千吉

エスマンの「神学部講演」にたいするブラウンソンの

批判について

——「神学部講演」はこの批判にたえられるか——

尾形敏彦

第二十六集 (昭和四十五年十二月)

『ジョン王』における庶子の性格と便宜主義の主題

青木 啓治

エマソンとその群(1)

——ラルフ・ウォルド・エマソン—— 尾形 敏彦

‘Glee’・「歓び(の歌)」と古言葉の復活について(その1)

——ワーズワスの『一八〇七年詩集』を中心に——

松下 千吉

英語において知覚と情動を表わす語の起源について

永野 芳郎

ウルフの最後の小説(2)

増山 学

決疑論者B夫人——『パミラ』第二部について——

山本 利治

Some Syntactic Innovations in the Final Part of  
*The Peterborough Chronicle*

永野 芳郎

歓びの静謐と生動——ワーズワスからクレアへ

——‘Glee’・「歓び(の歌)」という言葉の復活について

(その三・結びとして)—— 松下 千吉

第二十七集 (昭和四十六年三月)

OE *Apollonius of Tyre*

佐々部 英男

三つの船

——第三十集 (昭和四十八年三月)

安藤 昭一

『間違』の喜劇

——『メナエクス兄弟』『アムビトル』

との比較——

小島 啓邦

ポープ前期の技法(1)——アレゴリーとその周辺——

酒井 幸三

『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』を結ぶもの

——ハルの英雄的性格と太陽と雲の主題—— 青木 啓治

ピクターの形式感覚

嶋原 真一

オセロウ——アイデンティティをめぐる——

岡田 洋一

第二十八集 (昭和四十七年一月)

外なるものから内なるものへ——イエイツの民衆観——

佐野 哲郎

肉体の復活——『チャタラー夫人の恋人』——

奥村 透

エマソンの詩「バックス」について 尾形敏彦  
ライトの「アウトサイダー」——人種性と普遍性—— 田中 礼

The Language of *Emars*, A Middle English Romance  
Part I. Phonology 永野芳郎

第三十一集（昭和四十八年十二月）

Anticipation of Experience

——ダンとパラケルサス、結—— 桜井正二郎  
ロレンスのリーダーシップ・ノヴェルズについて  
——「エアロン」の杖」から「翼ある蛇」まで——

ウォーレス・スチーヴンズの世界 奥村 透  
——“Notes toward a Supreme Fiction”について——

*The Owl and the Nightingale* の英語 大浦 幸男  
佐々部 英男

第三十二集（昭和四十九年三月）

恣意の空間と摂理の空間（その一）

——「リア王」の浜セリ採り・覚え書き——

エマソンの詩について——序説—— 松下千吉  
尾形敏彦  
固き世に投入られた優しさ

——ホーソン短篇論(1)「優しき少年」——

三宅卓雄

Marvell の ‘*Ros’* と ‘*On a Drop of Dew*’ 蜂谷 昭雄

第三十三集（昭和五十年二月）

【批評論】注解(一) 酒井幸三  
混沌の夜への眼差し

——「親戚モリヌー少佐」のディスクリール——

(ホーソン短篇論2)

「ジークル博士とハイド氏」解釈(1) 三宅卓雄  
竹森 修

へミングウェイの中国ルポ 鳴原真一

第三十四集（昭和五十年十二月）

「アントニーとクレオパトラ」——リアリティの問題——

岡田 洋一

悪夢と日常への眼差し

——「若者グッドマン・ブラウン」のディスクリール——

(ホーソン短篇論3)

「緑樹の陰で」について 三宅卓雄  
増山 学

「ジークル博士とハイド氏」解釈(2) 竹森 修  
角倉 康夫

アーヴィング・パビットのジュベール論

第三十五集（昭和五十一年三月）

続・エマソンの詩について——序説—— 尾形敏彦

「ジークル博士とハイド氏」解釈(3) 竹森 修

フェノロサリパウンドによる

謡曲「錦木」の英訳をめぐって 長谷川 年光

第三十六集 (昭和五十一年十二月)

十八世紀とシェイクスピアの喜劇

——女性登場人物の批評に関する覚え書——

小島啓邦

エミリー・ブロンテの詩の世界

奥村透

イエイツの「悲劇のなかの喜劇」

桜井正一郎

「めりけんアレルギー」

鳴原真一

伝統の新しい擁護——Margaret Drabbleの文体(1)——

豊田昌倫

第三十七集 (昭和五十二年三月)

デアドラの物語——アイルランド伝説の側面——

佐野哲郎

文学と文化の間(序論)

——ヘンリー・ジェイムズにおける言語の意味——

渡辺久義

トリストロの謎を生むもの

——トマス・マンチョンの*The Crying of Lot 49*について——

中村絃一

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——ブルタルコスを中心に——(I)

『ジュリアス・シーザー論』(その一)

18世紀イギリスにおける小説批評(II)

*The Translation of a Hero*

木村輝平  
山本利治  
David Hale

第三十八集 (昭和五十二年十二月)

結句有情——ワイアットからシェイクスピアへ——

桜井正一郎

エマスの『自然論』

尾形敏彦

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——ブルタルコスを中心に——(II)

『ジュリアス・シーザー』論(その二)

木村輝平

第三十九集 (昭和五十三年三月)

シェイクスピアの史劇におけるアイロニーについて

——主題と性格の問題——

ホイットマンにおける性の表現

『非常手段』覚え書

シェリーとピンダロス

——「エウガネイ連山」をめぐって——

青木啓治  
田中礼  
増山学  
蜂谷昭雄

第四十集 (昭和五十四年一月)

*Beowulf* における酒宴のたのしみ

キーツの死の諸相

『マンソイの子マース』対訳

佐々部英男  
藪下卓郎  
蜂谷昭雄

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルトルコスを中心に——(Ⅲ)

『ジュリアス・シーザー』論(その三)

木村輝平

ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵

フェノロサ資料(Ⅰ)序

村形明子

Theories Behind Language Acquisition Theories

David Sell

第四十一集(昭和五十四年三月)

恣意の空間と摂理の空間(その二)

——『序曲』(第一卷)の鳥の巢掠りの少年・

覚え書き(一)——

松下千吉

エマソンの『英国人の特性』

——愛国者エマソンの一面——

小島啓邦

戯れの言葉

——メルヴィルの「独身男達の天国と

乙女達の地獄」について—— 中村絃一

T・S・エリオットとアーヴィング・バビット

角倉康夫

ジェフリー・オヴ・マンマス『メルリーヌス伝』(訳)(1)

六反田 収

フェノロサの「文学真説」

——ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵

遺稿(Ⅱ)—— 村形明子

第四十二集(昭和五十五年二月)

恣意の空間と摂理の空間(その三)

——『序曲』(第一卷)の鳥の巢掠りの少年・

覚え書き(二)——

松下千吉

イエイツにおける「力への意志」

——劇『カルヴァリー』について—— 渡辺久義

中期英語における印欧系語詞の廃用について

永野芳郎

Years and the Noh: The Supernatural in Drama

長谷川 年光

第四十三集(昭和五十五年八月)

シェイクスピアの『リチャード二世』再考

——王の没落と「詩人的性格」について——

青木啓治

"All Wars are Boyish"

——メルヴィルの四つの戦争詩—— 中村絃一

ジェフリー・オヴ・マンマス『メルリーヌス伝』(訳)(2)

六反田 収

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルトルコスを中心に——(Ⅳ)

『アントニーとクレオパトラ』論(その一)

アントニウスとクレオパトラの恋 木村輝平

フェノロサの京都社寺什宝調査メモ

——ハーヴァード大学ホートン・ライブラー蔵

遺稿(Ⅲ)—— 村形明子

第四十四集(昭和五十五年十一月)

イエイツにおける苦悩への意志、その宗教性の構造

——劇『煉獄』をめぐる—— 渡辺久義

Commentarii Erythologica (I)

——擬音語と鳥の名称—— 永野芳郎

On Word Meaning David Sell

第四十五集(昭和五十六年十月)

詩の進歩と進歩の詩 蜂谷昭雄

底無ししを中心から——シェイマス・ヒーニーのボググ詩—— 佐野哲郎

回想の楽園を求めて——メルヴィルの『オム』覚書—— 中村絃一

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルトルコスを中心に——(Ⅴ)

『アントニーとクレオパトラ』論(その二)

アントニウスとクレオパトラの恋(続)

木村輝平

コウルリッジの『失意のオウド』

藪下卓郎

第四十六集(昭和五十七年三月)

『オールメイヤーの阿房宮』について 奥村透

イエイツにおける詩と政治、あるいは孤独と集団 渡辺久義

メルヴィル『マーディ』のための一つの覚書

——その「語り手」といわゆる「逸脱」の章について——

『タイニー・アリス』の構造 中村絃一

文体論再考 宮内真一

考える人——エマソンの『アメリカの学者』—— 弘

西行の歌「くもり無き山にて……」解釈 尾形敏彦

メルヴィル『レッドバーン』の語り手について 竹森修

——『マーディ』との関連におとづ—— 中村絃一

Some Poems on the Poet and His Problems David Hale

Ernest F. Fenollosa's "Notes for a History of the Influence of China upon the Western World": a Link between the Houghton and the Beinecke Library Manuscripts 村形明子

第四十八集 (昭和五十八年三月)

さまざま語り口

——メルヴィル『ホワイト・ジャケット』覚書——

中村 紘一

恣意の空間と摂理の空間 (その四)

——『序曲』(第一巻)の鳥の巢掠りの少年・

覚え書き(三)——

松下 千吉

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プタルコスを中心に (VI)——

『アントニーとクレオパトラ』論 (その三)

アエノバルプス、ポンペイウス、レピドゥス

木村 輝平

第四十九集 (昭和五十八年十二月)

ジェイン・オースティンにおけるジェントルマン (I)

山本 利治

ロマン派における〈未完〉の問題 (その一)

——コウルリッジ・会話詩群を中心に——

藪下 卓郎

Melville and His "Two Books"

福岡 和子

『美術真説』とフェノロサ遺稿

村形 明子